宮腰研究主幹、水産学会水産学技術賞、道総研理事長賞を連続授賞！

－地道な研究の積み重ねの大切さを改めて振り返って－

小林 美樹

さけます内水試さけます資源部宮腰研究主幹が、平成25年度水産学会水産学技術賞と平成26年度北海道立総合研究機構職員理事長賞(写真)を授賞しました。研究名は「サケマス資源の増殖保全技術の向上に関する研究」で、主幹がこれまでに行ってきたサクラマスの漁獲尾数、釣獲尾数の推定や遡上親魚、降海幼魚の推定に加え、北海道で自然産卵が行われている河川数を明らかにするなどの一連の業績に対して与えられたものです。これら詳細は、「さけます内水面だより」等に詳しいので、割愛させていただきます。ここでは、彼の昔を少し振り返って、今があるベースについて、小職の思うままに書き留めてみました。

今回の連続授賞は、彼の今までの地道な研究の積み重ねであるとともに、彼の常に積極的で前向きな姿勢が生んだ結果ともいえると思います。昔をたどれば、彼は旧道立水産孵化場森支場（元道南支場森試験池）配属をスタートに、そこではサケや池産サクラマス飼育管理業務にどっぷり携わる傍ら、研究機関である当場が行政とタイアップしながら実施している事業の推進とは別に研究を発展展開させるためには、何をしていかねばならないのかなど自問自答しながら、次配属先である旧増毛支場（元道北支場）で、その花が開き始めたと言っても過言ではないでしょう。当時、行政も含め、当場では池産サクラマスを使った当該魚種資源の増大に向け、職員皆一丸となって努力していた時期です。しかし、職員皆研究職でありながら、サケの放流事業、池産サクラマスの飼育放流事業と、研究よりも事業のウエイトが極めて大きい時代で、なかなか研究業務までをもこなすだけの時間はもちろん、体力と精神力を常に保持し続けることは並大抵なことではありませんでした。しかし、その中にあって、彼は、事業で最も重要視される「放流」という行為の実施だけでなく、放流したものがどのように対象とする魚種の資源全体に貢献しているのかなどを客観的に評価することが次につなげるためにも如何に重要かを、自らの身体にむち打って、独自に調査データを取得積み重ね、サクラマスにかかる評価法の基礎を作り、我々に示してきたと言えます。

それからの彼は、様々に研究展開し、今日に至っており、後生につなげることはもちろん、道民のためになる研究の展開を・・・と常に模索しています。時代とともに求められるニーズも変遷を繰り返しますが、研究者たる我々は、目先の問題を解決するだけにとどまらず、それらニーズの更なる先を見通した上で研究を組み立て、進展させていくことが大切です。これからも彼の活躍を大いに期待したいところです。

（さけます資源部　こばやし みき）

平成26年度　地方独立行政法人北海道立総合研究機構職員表彰　平成26年10月7日　於 京王プラザホテル札幌